事象構造に関する日中対照研究の展望
～特に使役表現をめぐって～

沈　力
同志社大学

日本語と中国語を形式的側面から観察する場合、両者は明らかに大きく異なるタイプの言語であることが分かる。

(1) 形態論的相違

a. 日本語は、拘束形態素が豊かである。

b. 中国語は、自由形態素が豊かである。

(2) 統語論的相違

a. 日本語は、Case や Tense のような統語的機能標識がある。

b. 中国語は、Case や Tense のような統語的機能標識がない。

一方、理論言語学の最大の目標は、自然言語の普遍的原理や規則を求めることである。日本語と中国語のような類型論的に大きく異なる言語を比較する場合、どんな成果が期待できるのだろうか。

(3) a. 異なるタイプの表現形式を観察して共通の認知モデルを発見する。

b. 共通の認知モデルを観察して異なるタイプの表現規則を発見する。

本研究は(3b)を中心に議論を展開していく。

人類は外界の事態を常に＜行為＞→＜変化＞→＜状態＞という事態発生の時間的順序に基づいて捉えている。これは行為連鎖(action chain)と呼ばれる普遍的認知モデルである(cf. Langacker:1991, Croft:1991)。一方、この「行為連鎖」は単なる時間的順序だけではなく、各概念の間につぎのような階層性も含んでいるとする仮説もある。

(4) <行為> -CAUSE- <変化<状態>>

それは(4)で示されているように、<状態>は<変化>の結果であり、<変化>の補語として含意される一方、<行為>と<変化>の関係は<CAUSE>という関数で結びつけられているという仮説である(cf. McCowley1971, Dowty 1979, Jackendoff1990, Levin and Rappapport Hovov1995, 影山 1996)。この語彙概念構造仮説は現在幅広く受け入れられている。

本研究では、CAUSE という関数は自然言語の中でどのように表現されているのか、つまり語彙レベルで表現されているのかそれとも構文レベルで表現されているのかに注目する。日本語と中国語を比べた場合、次のような事実が観察される。

(5) a. 日：[倒れる：倒す]、[壊れる：壊す]、[腐る：腐らす]、[折れる：折る]

b. 中：[倒　：×]、[坏　：×]、[烂　：×]、[折　：×]

(5)に示されているように、日本語には大量の有対他動詞が見られるのに対し、中国語にはそれがほとんど見られない。もちろん、次のような例外もある。

(6) a. 日：[開く：開ける]、[閉まる：閉める]、

b. 中：[开　：开]、　[关　　：关　]

少数であるが、中国語にも日本語と同様の有対他動詞が見られる。しかし、中国語の有対他動詞は日本語の有対他動詞と違って、<CAUSE>が含まれないことに注目されたい。この事実は結果キャンセルテストによって裏づけられる。

(7) a. 日：?太郎はドアを開けたが、開かなかった。

b. 中：张三开门了，可是门没有开开。

(7)に示されているように、日本語の「ドアを開ける」文は結果キャンセルできないのに対し、中国語の「开门」文は結果キャンセルできるという対立がみられる。この事実は、日本語の有対他動詞には CAUSE が含まれるのに対し、中国語の有対他動詞には CAUSE が含まれないことを意味する。上の観察が妥当であるとすれば、日本語と中国語の対立(5)は次のようなことを示唆する。< CAUSE>は日本語では語彙レベルで表示されるのに対し、中国語では語彙レベルで表示されない。

本研究では、中国語と日本語の対立を統一的に説明するために、つぎのことを提案する。概念構造がどのレベルで表示されるかは、自然言語の形態的特徴によって決まる。(4)の概念構造は形態法が発達している日本語では語彙レベルで表示されるのに対し、形態法の発達していない中国語では統語レベルで表示される。この提案は以下の３つの根拠によって支持される。

根拠１：日本語の有対他動詞接辞と語幹の間にはいかなる要素も挿入できないのに対し、中国語の動作動詞と変化動詞の間には<CAUSE>の可能性を表す「得/不」が挿入できるという事実から、中国語と日本語の使役表現の形成レベルが異なることがわかる。根拠２：古代中国語データ『斎民要術』や現代ビンナン方言データにおいて<行為>と<変化>の間に使役マーカーが観察されている。この事実から、中国語の使役-結果構造は基本的に統語レベルで形成され、さらに変化動詞が使役マーカーを取り込むような形で語彙化していると言える。根拠３：日本語の結果構文には<行為>が含まれるのに対して中国語の結果構文には<行為>が含まれない。この事実から、CAUSE について日本語と中国語の視点が異なることがわかる。日本語では CAUSE は<行為>を前提にして仮定される関数であるのに対し、中国語では<変化>を前提にして仮定される関数であるという違いである。

キーワード：行為、結果、使役、語彙レベル、統語レベル